

柔道の普及と変容に関する研究 - グレイシー柔術に着目して -

著者	谷釜 尋徳
著者別名	TANIGAMA Hironori
雑誌名	スポーツ健康科学紀要
号	13
ページ	15-43
発行年	2016-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008118/

柔道の普及と変容に関する研究 ーグレイシー柔術に着目してー

谷 釜 尋 徳¹⁾

The spread and transformation of the Judo

TANIGAMA Hironori

1. はじめに

柔道は明治期になって、嘉納治五郎が日本古来の柔術諸流派の要素を体系化したものである。この日本独自の文化は、移動手段の発達などと相まって日本の文化圏を飛び出して世界各国に普及するところとなり、やがて国際スポーツ¹⁾の仲間入りを果たすに至った。

ところが、柔道の海外伝播史を紐解いてみると、必ずしも日本の柔道がそのまま現地の人々に受け入れられた場合ばかりではなかった。柔道という武道文化が現地の文脈において解釈され、幾度となく変容を繰り返すことで、国際スポーツとしての「JUDO」とは別の形で現存している例もみられるためである。その好例を、今日の総合格闘技界を牽引しているブラジル発の「グレイシー柔術」²⁾に見出すことができる。

グレイシー柔術を体系化した人物はエリオ・グレイシーであったが、彼の兄カルロス・グレイシーに技を伝授したのが、講道館から派遣された日本人の前田光世であった。前田は嘉納治五郎の

講道館柔道を広く普及させるべく、世界各国を渡り歩いて他流試合を繰り返し、ブラジルの地で生涯を終える。やがて、前田が伝えた柔道は、ブラジル社会のなかでより実戦的な格闘技へと様変わりし、グレイシー族によって総合格闘技界に旋風を巻き起こすことになるが、その波はすべからず日本にも押し寄せている。これは、日本で誕生した柔道が一旦ブラジルへ伝播し、それがあつた一定の期間を経てグレイシー柔術として体系化された後、今度はグレイシー柔術の方が世界各国にこれを普及させるべく、日本にも持ち込まれた稀有な事例であろう。

ところで、「投げ技」が発達した現在の柔道では、投げ技によって勝負が決することが多くみられるが、グレイシー柔術の方はそれとは若干趣を異にしている。グレイシー柔術の試合運びは、いわゆる「寝技」に持ち込んで、最終的には柔道でいうところの「固め技」(関節技、絞め技、抑え込み技)をもって相手を仕留めるパターンが大半を占めているからである。

このように、グレイシー柔術は柔道のなかでも

1) 東洋大学スポーツ健康科学(白山キャンパス)研究室 〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20
Sports and Health Science Laboratory, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606, JAPAN

固め技に特化して発達してきたものと考えられるが、その技術体系には今日の柔道の試合では見られないような技も含まれている。興味深いのは、その技の多くがかつての柔道には存在していたことである。柔道は国際化と引き換えに様々な要素を切り捨てていったが、グレイシー柔術は前田光世が伝えた嘉納式の講道館柔道を固め技（寝技）に特化してそのまま継承し、度重なる他流試合を経て練り上げられたと考えられる。だとすれば、今日のグレイシー柔術には日本における柔道の原形が見て取れるといっても過言ではあるまい。

そこで本稿は、柔道という日本固有の武道文化が、日本の文化圏を飛び出してどのように普及および変容していったのかについて、特にブラジルにおける柔道の変容形態たるグレイシー柔術に着目して論じるものとした。

ここで、本稿に関連する先行研究を眺め返してみよう。嘉納治五郎が創始した講道館柔道の国際的な普及過程については、従前に数多くの研究がなされており³⁾、グレイシー柔術誕生の契機となった前田光世に関しても多くの史実が明らかにされてきた⁴⁾。また、グレイシー柔術の優位性がグレイシー一族の活躍を通して世界中に認知されて以降、その歴史性に迫る論述も散見されるようになった⁵⁾。さらには、グレイシー柔術が日本に上陸するやいなや、格闘技専門誌を中心にグレイシー柔術関連の特集が組まれている⁶⁾。

しかしながら、本稿のように日本を中心地とした「柔道の普及と変容」という視点からグレイシー柔術の解明に取り組んだ研究は管見では見当たらない。

2. 日本における柔道の誕生

ここでは、グレイシー柔術の礎となった日本の柔道について、その誕生の歴史を概説するものとした。

2-1 近代以前における柔術の展開

日本の「柔術」とは、一般的に「日本古来の徒手あるいは短い武器による攻防の技法を中心とした武術」⁷⁾と定義されている。明治43（1910）年刊行の『柔道手引草』によれば、「柔術の開祖は何人であるか又凡そ如何なる年代に出来たのであるかは判然して居らぬ。」⁸⁾という。

柔術の原形は、中世の昔に武士の教養として広く行なわれた「組打ち」などにみることができ。中世の合戦は、馬に跨り弓矢を用いて敵軍と相対するものであったが、最終的には馬を降りて白兵戦に移行し、相手と組み合っ（＝組打ち）勝負を決することが多くみられた⁹⁾。近世になって泰平の世が実現すると、柔術は合戦を想定した実用術としての価値を喪失して武芸化し、多くの流派が乱立していった。やがて、幕末期になると流派相互間での交流（他流試合）が盛んになっていく。

この間の経緯については、老松が簡潔に説明しているので、以下に引いておきたい¹⁰⁾。

わが国においては、古くから相撲と組討は一体となって発展してきたが、源平時代になり、武士の間において組討の技術がとくに発達し、さらに戦国時代から江戸時代にかけて全国各地にその研究錬磨に精通した名人、達人を生み、その技術は高度化され、体系化されて、いわゆる柔術時代を迎えるにいたった。柔術には流派があり、室町時代にはじまった堤宝山流、享禄5年創始の竹内流をはじめ、関口流、渋川流、楊心流、荒木流、三浦流、直信流、起倒流、天神真楊流など幕末までに数十の流派を整えている。

幕末期における柔術については、明治期の雑誌『運動界』の記事において下記のように回顧され

ている¹¹⁾。

古来、柔術の方法に二あり、其一は、投を主とするものにして起倒流等之に属し、他は、竹内流等に見るが如く、捕押ふるを以て主とせしなり。これただ二大別にして、徳川の末造に至りては諸流分立、一百有余流となりしが、其行ふ所は、もとより皆、投、固、當の外に出でざりき。

上記引用文によれば、幕末期の柔術は投げ技を中心とする流派と、抑え込みなどの固め技を重視する流派に二極化しており、数ある柔術諸流派もこのいずれかに該当するという。また、文中において「其行ふ所は、もとより皆、投、固、當の外に出でざりき」と記されているように、柔術諸流派の技術体系は「投」(投げ技)、「固」(固め技)、「當」(当て身技)の3つに集約される。このことについて、同記事には関連の解説がみられるので、併せて引用しておきたい¹²⁾。

投は、即ち敵を投ぐる事にして、固とは、押伏せて敵手をして起き得ざらしめ、或は關節を逆に振ち、或は咽喉を絞むる等なり。當とは、所謂當身して、手拳或は足先を以て或は突き或は打ち、又は蹴り、以て敵手の身体の危険なる部分に當つるなり。

上記のような特徴をもった柔術が、明治期になると嘉納治五郎をして「柔道」という名称をもって体系化されることとなる。以下において、その模様を見ていこう。

2-2 嘉納治五郎による講道館柔道の創始

明治15(1882)年、嘉納治五郎は東京の下谷区北稻荷町にある永昌寺の書院を道場として講道館

を開設した。柔道の歴史の幕開けである。前述したように、近代以前の日本には武士によって洗練された柔術が存在していたが、同じ柔術であっても流派によって技術体系や考え方が異なる場合が多くみられた。

嘉納は18歳で天神真楊流の道場の門をたたいて福田八之助に師事し、柔術の稽古に没頭した経験を持つ。また、その後も起倒流柔術の道場に入門し、当流の達人と呼ばれた飯久保恒年に指導を仰いでいる。この経験が、柔術を近代化して「柔道」を創始する際に大きな影響を及ぼすことになる。それは、嘉納が記述した以下の文面において確かめることができる¹³⁾。

維新前に柔術、體術、やはらなどの名稱で世に行はれて居た一種の武藝があつた。私も最初さういふ武藝を學んでそれから段々研究の結果明治十五年に至つて始めて講道館柔道といふものを創始したのである。それ故講道館柔道は昔の柔術から發達して今日の形になつたものに相違はない。

上記引用文のごとく、嘉納は柔術を手掛かりとして講道館柔道を創始するに至った。数ある柔術流派のなかでも、嘉納が嗜んだのは天神真楊流と起倒流であったが、この両者は対照的な技の体系をもっていた。天神真楊流は絞め技、関節技、抑え込みなどの固め技を中心に据えていた一方で、起倒流は投げ技を重視していたため、結果として嘉納は多様な柔術の技を幅広く学ぶことができたのである¹⁴⁾。

講道館開設当初は、その技の体系も上記二流派を折衷させたものであり、嘉納も「最初のうちは、天神真楊流または起倒流の形を、昔のままで教えていた」¹⁵⁾と語っている。それゆえに「彼(嘉納治五郎—引用者注)がはじめて道場を開い

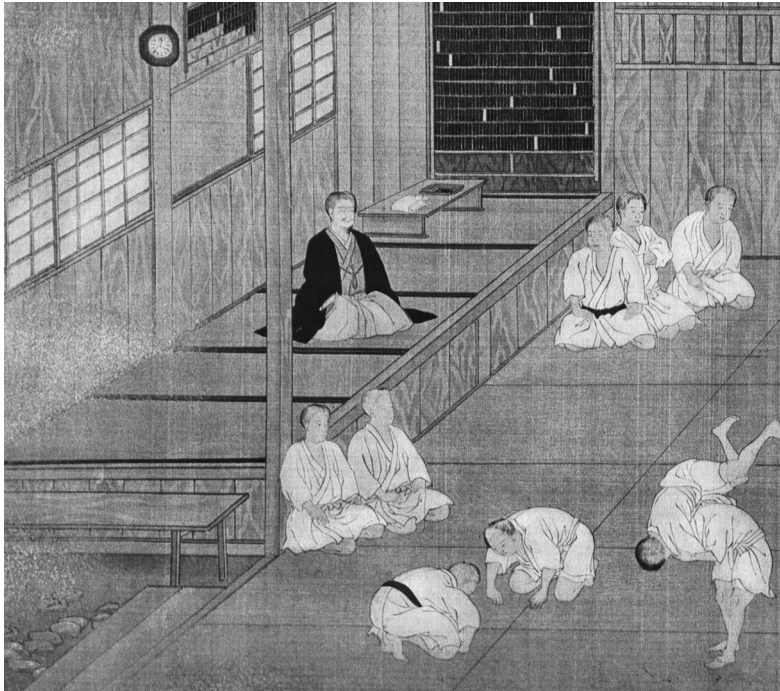


図1 初期の講道館における稽古の風景（菱田春草画、部分）
松本芳三編『写真図説 柔道百年の歴史』講談社、1970、p.16より転載。

たことで講道館柔道創始の年とされる1882年には、まだ『講道館柔道』ではなかった。』¹⁶⁾との見解も示されている。

その後、嘉納は二流派のみならず柔術各派の様々な技を比較検討し、各々の長所を活かすべく集成していった。こうした試みが実を結び、明治20（1887）年頃になると講道館柔道は二流派の折衷的な段階を脱して独自の技の体系が形成されたという¹⁷⁾。

ところで、嘉納はどのような方法をもって門人たちに柔道を教授していたのであろうか。それは、嘉納が「天神真楊流の先生も、また、起倒流の先生も、いずれも、皆形と乱取とをあわせ行なった人々であったから、自分もこの形と乱取とを両流に学んだのである。」¹⁸⁾と語っているように、「形」の稽古と「乱取り」の稽古に大別されるものであった。講道館発行の『大日本柔道史』には、嘉納の言説に基づいて形と乱取りに関して

次のように記されている¹⁹⁾。

柔道修行の方法は之を亂取と形の二種に分つのである。嘉納師範は亂取に就て「亂取とは一定の方式に據らず、各自勝手の手段を用ひて練習するを言ひ、形とは攻撃、防禦に關し豫め種々の場合を定め、理論に基き身體の操縱を規定し、其の規定に従ひて練習するを言ふ」と説明されてゐる。

嘉納がこの二種類の方法をもって柔道の稽古を形成したことには理由があった。嘉納の自伝より、関連の記述を探ってみよう²⁰⁾。

形ばかり研究しておつては、きまりきった順序で一定のかたちで練習するのであるから、もし先方から不定のかたちで来れば、往々にして狼狽したり、仕損じたりすること

がある。故に、先方が、どんなわざを仕掛け、どんな方法でくるかわからない状態において、互いに仕合うことは、きわめて必要のことである。かような練習は、形と相まちで、始めて柔術の完き修行となるのである。

嘉納は自身の柔術修行の経験から、形と乱取りは相互に補完し得る性質であると見なし、柔道にも高い実戦性を期待していたことがわかる。

以下では、嘉納の講道館柔道を習得した前田光世が、どのようにして海外での異種格闘技戦を戦ったのか、その足跡を辿ってみたい。

3. 前田光世の海外遠征と異種格闘技戦

3-1 前田光世の講道館入門

前田栄世（後の前田光世）は、明治11（1878）年に青森県中津軽郡船沢村（現在の弘前市）で生まれた。弘前城内には、前田の功績を称える顕彰碑が建てられている。その碑文には「宣揚柔道」という題字に続けて、前田の生涯の概略が簡潔に記載されているので、丸島の著作より引用しておきたい²¹⁾。

君は明治十一年十一月船沢村に生まる。父は了、母はいそ、弘前中学、早稲田中学を経て東京専門学校に学ぶ。明治三十年講道館に入門、三十七年四段を以て当時既に実力第一人者として世に認められ、早大、一高、学習院、高師などの柔道指導に当り、更に米国及び欧州諸国を遍歴し、五尺四寸（約161cm—引用者注）、十八貫（約68kg—引用者注）の体軀を以て、よく全世界に日本柔道の威力を発揚し、後七段に進む。

大正四年にブラジルに渡り、海軍兵学校の師範となり、後バーレンに住みアマゾン開発に意を注ぎ、南米拓殖会社の創立に尽瘁し、

同地方移民を先導す。

君は性温良温顔、コンデ・コマの名をもって慈父の如く敬慕され、斯くして二十五星霜昭和十六年十一月同市に永眠す。享年六十三才。

異郷に淋しく眠る君の遺徳を顕彰し、その偉業を偲び、茲に郷党の同志この碑を建立す。

昭和三十一年十月

前労働大臣 千葉三郎 撰

松堂 高山亀代 作書

上掲の碑文により、前田の功績の概略を窺い知ることができるが、以下では前田の上京から講道館時代までを掘り下げて記述してみたい。

明治26（1893）年、前田は弘前高校に入学したものの、二度の留年を機に上京することとなり早稲田中学に編入学した²²⁾。前田の上京と時を同じくして、明治29（1896）年に東京専門学校（現在の早稲田大学）に柔道場が新設され、ここで前田は中学生の時分から柔道の稽古に励むようになった。

明治30（1897）年3月、講道館の横山作次郎を師範に迎えて東京専門学校柔道部が創設された。この頃、同校の柔道場には嘉納治五郎も指導に訪れていたという²³⁾。明治30（1897）年6月、東京専門学校の学生となっていた前田は、小石川の下富坂町の講道館に正式に入門する。

前田が初めて講道館中に名をとどろかせたのは、明治31（1898）年12月の無段者を対象とする「月次勝負」であった。ここで前田は、三本勝負で連続して14～15人を勝ち抜くという快挙をやったのける²⁴⁾。この日の活躍が認められ、明治32（1899）年正月の鏡開式（講道館の年中行事）において初段の認定を受けた前田は、さらに同年10月の昇段式で二段に昇段した²⁵⁾。

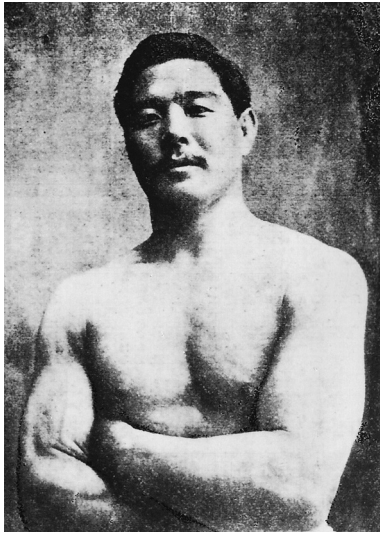


図2 四段の頃の前田光世
前田光世記・薄田斬雲編『世界横行
柔道武者修業』博文館、1912、p.5よ
り転載。

明治34（1901）年頃になると、前田は佐村嘉一郎、轟祥太とともに「講道館の三羽鳥」と呼ばれるようになり、その中でも前田が最有力であると評されるほどの実力を身につけていた²⁶⁾。

そんな前田に転機が訪れたのは、明治37（1904）年のことであった。「講道館四天王」の一人に数えられた富田常次郎が柔道の海外普及のために渡米することとなり、その随伴者として高等師範学校の山内繁雄とともに前田が抜擢されたのである。渡米直前、講道館は富田を六段に、前田を四段に昇段させている。

この渡米以降、前田は世界各国を渡り歩き、数々の異種格闘技戦を通して柔道の海外普及に寄与するところとなる。

3-2 前田光世の異種格闘技戦の足跡

ここでは、前田光世が体験した世界各国での異種格闘技戦について時系列で検討していくものとする。前田はアメリカを皮切りに、イギリス、ベルギー、スペイン、キューバ、メキシコ、グアテ

マラを経て最後にブラジルに到着し、図らずもグレイシー柔術誕生の礎を築き上げることとなる。以下では、ブラジルに至るまでの前田の異種格闘技戦の模様を地域ごとに区分して確認していくことにしよう。

なお、前田は現地から日本の友人である薄田斬雲に宛てて多くの書簡を出しており、それを基に薄田は『世界横行柔道武者修業』²⁷⁾および『新柔道武者修行』²⁸⁾を著している。以下では、この2点を基本資料として論じていくものとする。

①アメリカ（1904年11月～1907年2月）

前田ら一行がニューヨークに到着したのは、明治37（1904）年11月16日のことであった。この土地で日本の柔道は著しく注目を浴びることとなるが、それは当時の世情とも関係していた。『世界横行柔道武者修行』には「時は日露戦争の真最中、我軍連戦連勝して今年中には旅順が陥落するだらうと云ふ人気の立つた時で、（中略）日本の柔道と云ふ事が著しく米人の注意を惹いた。」²⁹⁾と記されている。

さて、前田が最初に戦ったのは「米國流の學生角力のチャンピオン」³⁰⁾すなわちレスリングの選手であった。前田は敵に対して何度も投げ技を見舞った後、絞め技と腕への関節技の連続で勝利している³¹⁾。

その後の対戦内容は表1の通りである。表には対戦場所、対戦相手（身長・体重）、試合結果、最終的な決まり手を判明する限り記載した。決まり手の欄に「（1本目）」「（2本目）」などがあるのは、その対戦が三本勝負で行なわれていた場合を示している。

②イギリス（1907年2月～1908年3月）

イギリスにおいても、前田はレスラーを中心に数々の異種格闘技戦をこなしている。その主な対

表1 前田光世のアメリカにおける主な異種格闘技戦

対戦場所	対戦相手（身長・体重）	結果	決まり手
キリスト教青年会	レスラー	勝ち	関節技
プリンストン大学	フットボール選手（約182cm・約98kg）	勝ち	投げ技
プリンストン大学	体操教師（約167cm・約68kg）	勝ち	関節技
プリンストン大学	レスラー	勝ち	不戦勝
コロンビア大学	学生	勝ち	絞め技
ニューヨーク体育クラブ	当クラブのチャンピオン（約113kg）	勝ち	絞め技
ニューヨークでの公開試合	レスラー（約182cm・約113kg）	勝ち	投げ技（1本目）
		勝ち	関節技（2本目）
ニューヨーク	レスラー及びボクサー	勝ち	抑え込み（1本目）
		勝ち	絞め技（2本目）
アトランタ	レスラー（約83kg）	負け	抑え込み（1本目）
		勝ち	抑え込み（2本目）
		勝ち	抑え込み（3本目）

前田光世記・薄田斬雲編『世界横行柔道武者修業』博文館、1912より作成。

戦内容は表2の通りであるが、特筆すべきはロンドン滞在時にレスリングのルールに則った試合を経験していることである。その結果を表によってみると、半分程度は勝利を収めていることから、前田の高い順応性を窺い知ることができよう。

③ベルギー（1908年3月～1908年3月）

次に前田が訪れた国はベルギーであった。滞在期間は僅か2週間であったが、前田はスポーツクラブにおいて複数の試合を経験している（表3参照）。いずれもレスラーとの対戦で、すべて勝利した。

④スペイン（1908年5月～1908年12月）

スペインには8ヵ月ほどの滞在であったが、ここでの主だった異種格闘技戦の記録は見受けられない。

この地で、前田には「コンデ・コマ」という異

名が付けられることになる³²⁾。前田の滞在時には、バルセロナで「コマ柔道倶楽部」が発足するなど、柔道はスペインに着実に根を下ろしていった。

⑤キューバ（1908年12月～1909年7月）

スペインを旅立った前田が次に目指したのは、南米のキューバであった。前田はここでも、滞在中にレスラーを中心として多くの異種格闘技戦をこなした。その主な対戦記録は、表4の通りである。

その他、ハバナのバイリー座という劇場で柔道を興行として披露していくなかで、前田は数多くの挑戦を受けることになるが、これをすべて退けた。『世界横行柔道武者修業』には「四ヶ月間に三百戦三百勝位にはなつて居る。」³³⁾と記されている。

表2 前田光世のイギリスにおける主な異種格闘技戦

対戦場所	対戦相手（身長・体重）	結果	決まり手
クロイドンの劇場	ボクサー	勝ち	関節技
	レスラー	勝ち	関節技
ロンドンのレスリング大会 （レスリングのルールで実施）	レスラー	勝ち	投げ技
	レスラー	勝ち	不明
	レスラー	勝ち	フォール
	レスラー	勝ち	不明
	レスラー	負け	フォール
	レスラー	負け	判定
		負け	フォール
ロンドンの劇場 （レスリングのルールで実施）	レスラー	負け	フォール（1本目）
		勝ち	投げ技（2本目）
ビクトリア近くの劇場	レスラー	勝ち	関節技
	レスラー（約167cm）	勝ち	関節技
	レスラー	勝ち	不明
	レスラー（約167cm）	勝ち	関節技
クロイドンの劇場	ボクサー	勝ち	関節技
	レスラー	勝ち	関節技
	レスラー	勝ち	関節技
ロンドンの劇場	レスラー	勝ち	投げ技
	レスラー（約113kg）	勝ち	判定
	レスラー	勝ち	フォール
	レスラー	勝ち	フォール
	レスラー	負け	フォール
	レスラー	負け	判定（1本目）
		負け	フォール（2本目）
ロンドン	レスラー	負け	フォール（1本目）
		勝ち	投げ技（2本目）

前田光世記・薄田斬雲編『世界横行柔道武者修業』博文館、1912より作成。

表3 前田光世のベルギーにおける主な異種格闘技戦

対戦場所	対戦相手	結果	決まり手
スポーツクラブ	レスラー	勝ち	抑え込み
	レスラー	勝ち	不明
	レスラー	勝ち	不明

前田光世記・薄田斬雲編『世界横行柔道武者修業』博文館、1912より作成。

表4 前田光世のキューバにおける主な異種格闘技戦

対戦場所	対戦相手（身長・体重）	結果	決まり手
ハバナ	現地人（約182cm）	勝ち	投げ技
	レスラー	勝ち	関節技
	レスラー	勝ち	関節技
	レスラー	勝ち	関節技
	レスラー（約109kg）	勝ち	関節技
		勝ち	関節技
	中国人	勝ち	関節技
	レスラー（約170cm・約94kg）	勝ち	投げ技
	水平（約182cm・約94kg）	勝ち	絞め技

前田光世記・薄田斬雲編『新柔道武者修行』博文館，1913より作成。

表5 前田光世のメキシコにおける主な異種格闘技戦

対戦場所	対戦相手	結果	決まり手
メキシコシティの劇場	レスラー	引き分け	不明
		勝ち	関節技
メリダの劇場	レスラー	勝ち	抑え込み
メリダの劇場	レスラー	勝ち	不明
メリダの劇場	レスラー	勝ち	関節技
メキシコシティの劇場	レスラー	勝ち	不明
メキシコシティの闘牛場	レスラー	勝ち	関節技
グアダラハラ	レスラー	勝ち	不明
メキシコシティの劇場	力自慢	引き分け	（1本目）
		勝ち	関節技（2本目）
	レスラー（約105kg）	勝ち	抑え込み
メリダ	レスラー（約139kg）	勝ち	不明
	レスラー	勝ち	関節技
メキシコシティの闘牛場	レスラー	勝ち	関節技
グワダラハラ	レスラー	勝ち	関節技
モントレー	ボクサー	勝ち	関節技
リオン	レスラー （約185cm・約109kg）	勝ち	関節技（1本目）
		勝ち	関節技（2本目）

前田光世記・薄田斬雲編『世界横行柔道武者修業』博文館，1912及び

前田光世記・薄田斬雲編『新柔道武者修行』博文館，1913より作成。

表6 前田光世のキューバ（二度目）における主な異種格闘技戦

対戦場所	対戦相手	結果	決まり手
ハバナ	レスラー	勝ち	関節技
	レスラー	勝ち	関節技
	レスラー	勝ち	関節技

前田光世記・薄田斬雲編『新柔道武者修行』博文館、1913より作成。

⑥メキシコ（1909年7月～1910年7月）

メキシコには約1年間滞在している。また、表5に示されているように、多くの異種格闘技戦も行なった。

⑦キューバ（1910年7月～1912年8月）

メキシコを後にした前田は、再びキューバの地を訪れた。ここでも複数のレスラーと対戦し、すべて勝利を収めている（表6参照）。

⑧グアテマラ（1912年8月～1914年）

次に前田は、グアテマラに到着した。ここでも柔道の普及に努めたとみえるが、主だった異種格闘技戦の記録はみられない。

3-3 前田光世の異種格闘技戦における技の特徴

以上述べてきたように、前田光世は世界各国において数多くの異種格闘技戦を経験した。ここでは、前田が用いた技の特徴に若干の考察を施してみたい。

①講道館柔道の技の体系

前田が用いた柔道の技を理解するためには、そのベースにある講道館柔道の技の体系を引き合いに出すことが当を得た手法であろう。そこで以下では、講道館が外国人初心者の便宜を図って英文で発行した解説書の邦訳版『柔道』³⁴⁾を基にして、その技の体系をみていきたい。

本書の「柔道にはどんな技があるか」の項には

「柔道の技は投技、固技、當身技と各性質の異つた三つの部門から成り立つてゐる。」³⁵⁾という文言に続けて、各々の技について簡潔な説明が施されている。すなわち、投げ技は「相手を投げ倒す方法」³⁶⁾、固め技は「相手を抑へたり、頸などを絞めたり、関節を逆にしたり捻ぢつたりする方法」、当て身技は「相手を打つたり、突いたり、蹴つたりする方法」³⁷⁾といった具体である。さらに『柔道』には、この三つの技がより細分化されているので、その内容を一覧表にして掲げておくことにしたい（表7参照）。

無論『柔道』の発行年は前田光世が活躍した時代よりも後年のものであるため、表7の技の体系が前田の習得したそれに連なるものかどうかは定かではない。しかし、井上によれば、表のような技の分類法は嘉納治五郎によって明治20（1887）年頃には確立されていたという³⁸⁾。だとすれば、嘉納時代の講道館の門下生であった前田もまた、概ねこのような技を身につけていたとみて差支えはなかろう。

②前田光世の異種格闘技戦における技の特徴

次いで、上述した講道館柔道の技の体系を踏まえて、前田の異種格闘技戦における技の特徴に迫ってみたい。前田の対戦記録を表1～6を通して振り返ってみると、大半は講道館柔道でいうところの「固め技」（抑え込み技、絞め技、関節技）によって勝負が決している。その理由の一端を、前田がメキシコから日本の友人の押川春浪に

表7 『柔道』にみる講道館柔道の技の分類

投技	立技	手技	体落、背負投、肩車、浮落、隅落、外巻込、その他
		腰技	浮腰、払腰、釣込腰、跳腰、大腰、後腰、移腰、その他
		足技	膝車、大内刈、大外刈、支釣込足、払釣込足、送足払、出足払、小内刈、小外刈、小外掛、足車、内股、その他
	捨身技	真捨身技	巴投、裏投、隅返、その他
		横捨身技	浮技、横掛、横車、谷落、横分、その他
固技	抑込技		袈裟固、崩袈裟固、後袈裟固、肩固、上四方固、崩上四方固、横四方固、縦四方固、その他
	絞め技		並十字絞、片十字絞、逆十字絞、裸絞、送襟絞、片羽絞、その他
	関節技		腕絡、十字固、腕固、膝固、脇固、その他
当身技	打技		拳当、手刀当、その他
	突技		拳当、指先当、肘当、その他
	蹴技		膝当、蹴頭当、踵当、その他

講道館編『柔道』講道館、1949、pp.18-19より作成。

宛てた書簡「西洋力士と吾輩の試合」における下記の一節にみることができる³⁹⁾。

講道館では寝業など面白くないから稽古をしなかつたが今では必要に迫られて大に稽古を行うやうになつた。それに此方の相撲と Catch as Catch Can (レスリングのスタイルの一種—引用者注) 及び Greek Roman (レスリングのスタイルの一種—引用者注) などで能く勝負をしたから、寝業も餘程上達して來た。此相撲は柔道の押込と同じやうなもので、勝負の決する處にあるのだ。(中略) 此相撲を取る毛唐は却々押へることを巧みにやる。萬更捨てたものでないから、少しばかり稽古をして見たが、今では自分と同じ體量の者ならば決して負けない。之は非常に押込の研究材料になつた。

このように、講道館時代の前田は、抑え込み技、絞め技、関節技などの「寝業」(固め技)を

好まなかつたようである。しかし、前田が対戦した多種多様なレスラーたちは「押へること」を得意としていたため、講道館時代は毛嫌いしていた「寝業」に関しても「必要に迫られて大に稽古を行うやうになつた」という。この経験によって、前田は高度な固め技を習得していったと考えられる。

こうして前田が習得した固め技は、レスラーのみならず何度か対戦したボクサーにも有効に働いたとみえる。それは、武道・武術専門誌『秘伝』に投じられた次のような見解にも示されている⁴⁰⁾。

前田が対戦した相手は、当時は西洋力士と呼ばれていたレスラーが多く、裸の場合が多いから、投げ技が限定され、寝技中心にならざるをえないこと。突きや蹴りなしで戦い、相手をギブアップさせるには締めか関節技になってしまうこと。これは相手がボクサーでも大して条件は変わらないはずである。前田

の方は当てや蹴りは用いない。相手は裸であるし、突きに対してはかいぐって組み付くのが一番である。

確かに前田は、アメリカ、イギリス、メキシコにおいてボクサーと対戦し、いずれも固め技で勝利している。しかしながら、イギリスにおけるボクサーとの対戦後に「此勝負、勝つは勝つたが、之を以て直ちに我はボキシングに勝てりとは言ひ得ない、今後、幾回か拳闘家と戦つて勝たねば、何にボキシング位…など、威張つた事は言へない。」^(ママ)⁽⁴¹⁾との記述がみられることからすれば、前田はボクサーに対しては苦手意識を持っていたのかもしれない。

ともあれ、以上の検討によって、前田の異種格闘技戦において固め技が決まり手の大半を占めた理由が浮かび上がってくる。丸島が「前田の柔道は、他流試合（異種格闘技戦）を重ねることで、その実戦性を高めていった。」⁽⁴²⁾と指摘するように、前田の講道館柔道は数々の異種格闘技戦を経て、固め技を重視するものへとシフトしていったのである。

ただし、決まり手は固め技であっても、前田はどの対戦においても頻繁に投げ技を繰り出していることを見逃してはならない。柔道では「一本」が取れるような投げ技であっても、相手が降参するまで戦う異種格闘技戦では、それをもって試合終了とはならないため、最終的には固め技に持ち込むことが効率の良い試合運びであったと捉えるべきであろう。

4. 前田光世による柔道伝播とグレイシー柔術の誕生

以上の検討によって、前田光世の世界各国における異種格闘技戦の足跡が明らかとなった。やがて、ブラジルに到着した前田は、この地でも柔道

の普及活動に努め、それが後にグレイシー柔術へと変容していくことになる。しかし、ブラジルに柔道を伝播させたのは前田が初めてではなく、それ以前に日本人移民の手によって柔道の伝播が達せられていた。その意味では、前田がブラジルにやってきた時点では、すでに当該地域において柔道を受容し得る素地が出来上がっていたと考えることができよう。

そこで以下では、まず前田の渡伯以前のブラジルにおける柔道伝播史を紐解き、次いで前田がブラジルに柔道を伝播させていく過程を詳らかにしたい。

4-1 前田光世の渡伯以前のブラジルにおける柔道伝播史

ブラジルにおける柔道伝播史を語ろうとすると、明治後期頃から続々と海を渡ってブラジルに移住した日本人移民の存在を欠くことはできない。日本人移民の中に柔道を嗜んだ者がいたとすれば、彼らを通してまずブラジルに柔道が伝えられた可能性が想定されるためである。

明治40（1907）年、労働力不足に陥っていたブラジルで日本人を対象とした新移民法が成立した。これを受けて、明治41（1908）年4月28日、笠戸丸に乗り込んだ日系移民第一陣791人が、ブラジルに向けて神戸港を出港した⁽⁴³⁾。ブラジルに暮らした日系移民たちは、互いに寄り集まって共同体を形成し、そこで柔道の心得のある者達が稽古をする環境が次第に整えられていった⁽⁴⁴⁾。彼らは、「僅かな休暇を利用して小麦袋で縫い上げた柔道着、枯草に防水布を被せた即席のマットをつくり稽古をつんだ」⁽⁴⁵⁾といわれている。ここに、柔道が現地生根を下ろす一つの契機があったといえよう。

具体的に、この当時のブラジルで柔道の普及に努めた人物をみていこう。

後に日伯新聞の社主となる三浦鑿は、日本で講道館柔道を習得した後に中国へ渡り、香港に停泊していたブラジル海軍の練習艦に便乗して渡伯した。この艦上で、三浦は柔道を披露したことを契機に護身術の教授を依頼され、ブラジル上陸後の明治41（1908）年12月には、リオ・デ・ジャネイロでブラジル海軍兵学校の柔道教師となった⁴⁶⁾。増田が「講道館柔道伝播はこれを始まりとしてよからう。」⁴⁷⁾と言及していることからすれば、ブラジルにおいて柔道はまず軍隊に伝えられたと見ることができる。三浦はブラジル伝統の格闘技「カポエラ」⁴⁸⁾の使い手と公開の異種格闘技戦を行うなど、柔道をブラジル社会に認知させる役割も果たした。

また、明治44（1911）年には、日本人移民の馬鈴薯（＝ジャガイモ）栽培の祖と称される馬見塚竹蔵がサンパウロ州警察において柔道を教授するようになり、その後道場を開設したといわれる⁴⁹⁾。馬見塚もこの道場を拠点として、ブラジルへの柔道の普及活動を行っていたのである。

ただし、『ブラジルに於ける日本人発展史』には「移民初期に於ては、邦人の数も少く、また財力餘力もなかつたため、何等記録すべき運動競技はなかつた」⁵⁰⁾と記載されている。ゆえに、この時代における柔道の普及活動は、上記のような個別の取り組みに留まっていたといわねばならない。

以上述べてきたように、ブラジルへの柔道の伝播は日本人移民のブラジル入植とほぼ同時に始まっていた。したがって、前田光世が柔道伝播を目的にブラジルに到達した時には、当該地域において柔道を受容し得る素地がすでに整えられつつあったといえよう。

4-2 前田光世による柔道の伝播とグレイシー柔術の誕生

先の検討においては、前田光世がアメリカを皮切りに世界各国で数々の異種格闘技戦を繰り広げた模様を、薄田斬雲の『世界横行柔道武者修行』⁵¹⁾および『新柔道武者修行』⁵²⁾に基づいて明らかにした。しかし、同史料に記載されているのは、前田がグアテマラに滞在していた大正3（1914）年までで、その後の前田の足取りは詳らかにされていない。丸島によると、グアテマラ以降の前田は、エルサルバドル、コスタリカ、パナマ、ペルー、チリ、アルゼンチン、ウルグアイといった中南米の国々を南下するように周遊していたという⁵³⁾。

やがて、大正3（1914）年のうちに前田はブラジルのサンパウロに入り、その後はリオ・デ・ジャネイロ、ミナス、ジェライス、バイア、ベルナンプコ、パライーバ、リオ・グランデ・ド・ノルテ、セアラ、マラニャンを経て、翌年の春にはアマゾン川河口の港町ベレンに到った⁵⁴⁾。ベレン到着後、前田はアマゾン最強の勇者を決する格闘技の大会に出場し、難なく優勝を果たしている⁵⁵⁾。しかし、この頃の前田は左腕のリウマチが慢性化し、以前のように積極的に異種格闘技戦に臨むことは困難な状況に陥っていた。

現地で前田を直接取材した古屋敏恵によれば、当時の前田の様子は次のようであったという⁵⁶⁾。

當年の元氣は稍衰へ、髭にも霜をおいてゐるが圓熟したる精神と、體力とは兩つながら重みを加へて、一層の威厳を持つて居る。堂々たる體格と心からの親切とが、外人の間にも傳はつて、今はベレン市になくてならぬ一人物として敬はれるに至つて居る。氏の武術を慕つてベレン市の警察官も、紳士も學生も、一様に道場集る。

ロスー引用者注)のスタイルも同じだった。』⁶⁰⁾とされているように、前田はカルロスに立ち技中心の柔道を教授したと考えられる。しかし、前述したように、前田は数多くの異種格闘技戦において試行錯誤する過程で、とりわけレスリング選手に対抗すべく元来得意ではなかった寝技の稽古にも励んだ経緯がある。これを考慮すれば、前田がブラジルに伝えた柔道には、立ち技を中心としながらもある程度の寝技が含まれていたと見てよい。ゆえに、前田による柔道伝播後、グレイシー柔術側がどこかの時点で立ち技よりも「寝技」を重視する方向性へとシフトしていったと考えるのが妥当であろう。

5. エリオ・グレイシーによるグレイシー柔術の発展

5-1 エリオ・グレイシーの柔術習得

上述の経緯をもって、カルロスをして「グレイシー柔術アカデミー」なる道場が創設され、グレイシー柔術の歴史が幕を開けることとなった。しかしながら、近藤の「現在のグレイシー柔術の技術の基礎を作ったのはエリオである」⁶¹⁾との見解や、丸島の「エリオは、カルロスがスタートさせたグレイシー柔術を、さらに改良し洗練させていった。」⁶²⁾との指摘にみられるように、グレイシー柔術の技術体系を作り上げたのは、カルロスの弟エリオ・グレイシーであった。エリオがカルロスとともに、グレイシー柔術の創始者と称される由縁である。

エリオは兄カルロスが道場で教授する様子を間近で見ながら、自らも柔術にのめり込んでいった。また、エリオは類稀な指導力を持ち合わせていたため、やがてエリオが道場の中心的指導者となり、カルロスは裏方でマネジメントをする側に回った。

指導に携わる過程で、エリオはカルロスと自分

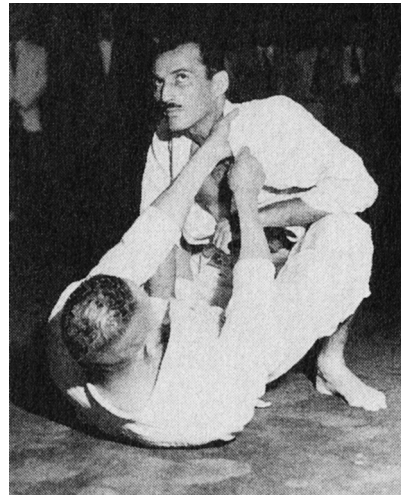


図4 寝技を仕掛けるエリオ・グレイシー
『ワールドボクシング5月号増刊 ゴング格闘技特別編集 グレイシー柔術の一冊』日本スポーツ出版社、1995、p.81より転載。

との間に技術的な相違が生じていることに気がつく。カルロスの前田直伝の柔術が「パワー、スピードが伴わなければ技術を駆使できないやり方」⁶³⁾であったのに対し、エリオの指導する柔術は「テコの原理と独自のポジショニングを活かした」⁶⁴⁾ところに特徴があったためである。したがって、前田が伝えた技術は、エリオによって改良が加えられたことになる。

こうして柔術を習得していったエリオは、昭和3(1928)年、僅か15歳でブラジル国内の柔術の大会で優勝を取めるほどにまで成長を遂げた⁶⁵⁾。

5-2 エリオ・グレイシーによる異種格闘戦の足跡

グレイシー柔術の使い手となったエリオは、その後は異種格闘技戦に積極的に挑戦するようになった。かつて前田が、異種格闘技戦を通して講道館柔道を世界各国に知らしめたように、エリオも自身とは趣を異にする格闘家に勝利することで、グレイシー柔術の優位性を広めようと考えた

のである。

異種格闘技戦に臨むにあたって、エリオが採用したのが「バーリ・トゥード」と呼ばれるルールであった。これは、「噛み付き・目潰し・金的（急所）攻撃以外なら全て有効という究極のルール」⁶⁶⁾と説明されるものである。

昭和5（1930）年、エリオが上記のルールをもって最初に対戦したのは、アントニオ・ポルトガルという名のプロ・ボクサーであった。17歳のエリオは、この異種格闘技戦の緒戦に裸絞めで勝利している⁶⁷⁾。同年、エリオはナミキという日系柔道家と闘って勝利し、またハフィーノ・サントスとのストリート・ファイトにも勝っている⁶⁸⁾。さらに昭和7（1932）年、レスリング世界選手権の準優勝者フレッド・エバートとも対戦し、2時間10分を戦って引き分けに持ち込んでいる⁶⁹⁾。

昭和9（1934）年には、エリオはミヤキと名乗る日系柔道家に圧勝し、続いてレスラーのズビズコにも勝利している⁷⁰⁾。その翌年、日系人柔道家の小野安一との対戦は引き分けに終わる⁷¹⁾。また、柔道家の矢野武雄や富川富興とも戦っているが、いずれも寝技で退けている⁷²⁾。

昭和11（1936）年、エリオはまたしても日系人柔道家と対戦することとなり、矢野武雄との再戦には引き分けたものの、マサゴイチと名乗る男には勝利している⁷³⁾。昭和25（1950）年、ボクシングの世界ヘビー級王者であったジョー・ルイスがブラジルを訪れた。この時、エリオはルイスに対戦を申し込んでいるが、ルイス側から辞退する旨の返答があり、この異種格闘技戦は実現しなかった⁷⁴⁾。同年、カリベという日系人柔道家との対戦が行なわれたが、エリオは裸絞めでこれを退ける。また、アゼベド・マイアという格闘家に対しては、僅か32秒で勝利するという離れ業をやった⁷⁵⁾。

ここまでの対戦成績の概要を振り返ってみる

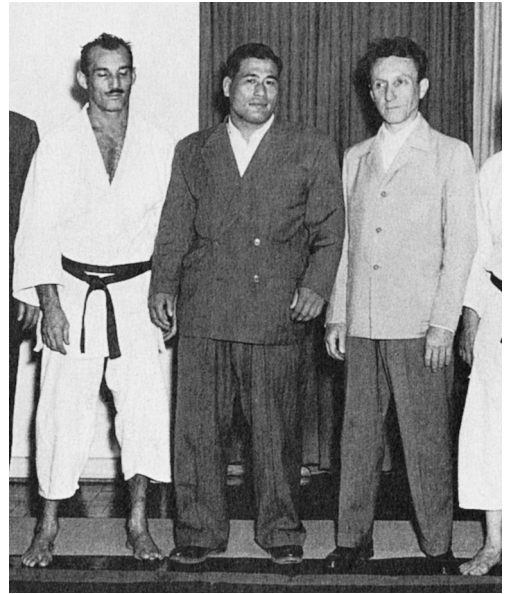


図5 木村と撮った写真（左からエリオ、木村、カルロス）

『ワールドボクシング5月号増刊 ゴング格闘技特別編集 グレイシー柔術の一冊』日本スポーツ出版社、1995、p.97より転載。

と、エリオは日系人柔道家と互角以上の戦いを繰り返していったといえるが、対戦相手となったのは「全日本選手権大会に出場できるようなレベルの選手ではなく、ブラジルの日本人コロニーに暮らす者（単なる柔道愛好家）が、ほとんどだった。」⁷⁶⁾という。

昭和26（1951）年7月20日、東京羽田から最強の刺客がブラジルに向けて旅立った。日本人柔道家の木村政彦、加藤幸夫、山口利夫である。このうち、エリオがまず対戦することとなったのは、加藤であった。

同年9月6日、リオ・デ・ジャネイロの室内競技場でエリオと加藤の対戦が実現した。この試合は10分3ラウンドの方式で行われたが、その数日前に肋骨を骨折していたエリオは本領を発揮することができず、引き分けに終わっている。およそ3週間後の9月29日、サンパウロで再試合が行われた。結果は、1ラウンド開始6分に寝技に持ち

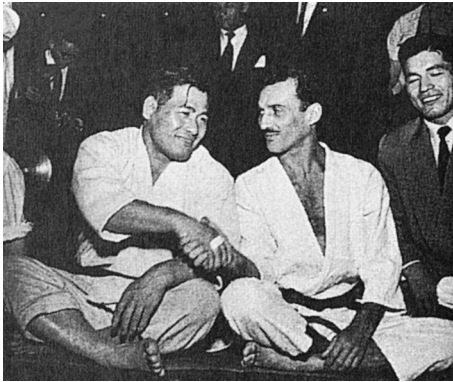


図6 試合後のエリオと木村
『ワールドボクシング5月号増刊 ゴング格闘
技特別編集 グレイシー柔術の一冊』日本ス
ポーツ出版社, 1995, p.97より転載。

込んだエリオが、加藤を前十字絞めで失神させて決着した⁷⁷⁾。

加藤との再戦から1ヶ月後、エリオはついに日本人最強の柔道家と称された木村政彦と対戦することになる。昭和26(1951)年10月23日、会場となったリオ・デ・ジャネイロのマラカナン・スタジアムには約4万人もの観衆が詰めかけた。加藤戦と同じく、この試合も10分3ラウンドの方式で実施されたが、2ラウンド開始3分、木村が仕掛けた袈裟固めと横三角絞めの連続技によってエリオは意識を失っていた。最終的には、エリオの兄カルロスがタオルを投入し、この対戦に終止符が打たれる⁷⁸⁾。エリオの異種格闘技戦の歴史において、これが生涯唯一の敗北であったという。

その後も、エリオの異種格闘技戦の歩みは続く。昭和31(1956)年にはボクサーのワリデマー・サンタナと対戦し、3時間以上の激戦の末、引き分けに持ち込んでいる。この時、エリオは43歳であった⁷⁹⁾。

5-3 エリオ・グレイシーの異種格闘技戦における技の特徴～前田式柔道の改良～

以上述べてきたように、エリオ・グレイシーは

数々の異種格闘技戦で好成績をあげてきたが、その対戦の過程においてエリオは独自の技術体系を作り上げていったと考えられる。先にみたように、エリオが最初に師事した兄カルロスの柔術は「立ち技」が主体であったとされるが、異種格闘技戦におけるエリオの試合運びは、大半が「寝技」に持ち込むことを主要な戦術としていたからである。事実、木村政彦もエリオについて「もっぱら寝技専門である。」⁸⁰⁾と回顧している。そこでここでは、エリオが具体的にどのようにしてカルロスの前田式の柔道に技術的な改良を加えていったのか、その点を考察することにしよう。

なお、ここでいう技術とは、岸野の「客観的な『運動経過の合目的的形態』」⁸¹⁾という定義によるものである。ゆえに、柔道の技術を含むスポーツ運動技術は、目的に適った合理的な動作を意味していると捉えておきたい。

マイネルによれば、スポーツ運動技術は「実践のなかで発展し、実践によって変化し、たえず修正や改良が行なわれ、また全体的に、あるいは部分的に古くなっていく」⁸²⁾性質を有するという。また、金子もマイネルと同じく「一般妥当的な構成要素によって成立している技術は『現在においては』という時間的制約をうけざるをえない。」⁸³⁾と説き、技術が流動的に変化していく可能性を示唆している。

こうした視点から捉え返してみれば、「立ち技」中心であったカルロスのグレイシー柔術を、エリオが「寝技」中心に改良していく可能性は十分にあったといえよう。

このことと関連して、エリオの三男であるヒクソン・グレイシーは、その著書の中で次のように語っている⁸⁴⁾。

日本人が教えた柔術（柔道の意—引用者注）と、われわれグレイシー一族が実践す

る、いわゆる「グレイシー柔術」との違いを簡単に説明しておこう。伝統的な柔術には、基本的にスポーツとしての形式がある。(中略)ところが、日本人がそれを持ち込んだのは、活気と混乱に満ちた実に秩序のない国、ブラジルだった。(中略)いつ何が起こってもおかしくないし、展開は予測不可能だ。そのため、われわれの柔術には、実戦で使えるという他のスポーツにはない特徴が加わった。

ヒクソンによれば、日本の柔道が現地の文脈において解釈された結果、さらに「実戦で使える」ように改良していく必要が生じたのだという。

また、ヒクソンは父エリオの取り組みについて、次のように証言している⁸⁵⁾。

「体が強くなくても、ちょっとした技術と、てこの原理があれば、誰にも負けないほど強くなれる。」そう信じ、まるで何かに取りつかれたかのように、新しい技術を身につけ、練習し、試合をすることだけを繰り返した。それがグレイシー柔術の原点になった。

身長170cm、体重65kgと格闘家としては小柄であったエリオにとって、パワーを駆使した柔術で敵を圧倒することは難しかった⁸⁶⁾。そのため、エリオは「てこの原理」に着目して、自らの体格に合致した寝技スタイルの柔術を生み出していったのである。エリオの六男ホイスが、グレイシー柔術の技術体系に通底する原理の一つとして「梃子の原理」⁸⁷⁾をあげているのは、ホイスがエリオの生み出した技術を継承していることの証左となろう。

このようにしてみると、前田光世がブラジルに伝えた数々の柔道技のうち、寝技こそが実戦を想

定した場合に有効であると捉えたエリオが、その部分に特化して体系化したものがグレイシー柔術であったと見なすことができよう。

6. グレイシー柔術のアメリカ進出

エリオ・グレイシーが展開した数々の異種格闘技戦を通して、グレイシー柔術の優位性がブラジル国内において認知されていたが、これが直ちに世界各国に伝播したわけではなかった。

全盛期を過ぎたエリオは、1960～70年代にかけてブラジリアン柔術グアナバラ州協会の会長として帯の階級や試合時間などの規定を整理し、グレイシー柔術の普及発展に努めていた。やがて、エリオの長男ホリオンの尽力によって、グレイシー柔術が世界の格闘技界を席卷していくことになる。ここでは、その模様を時系列で概観することにした。

6-1 ホリオンのグレイシーのアメリカ進出

グレイシー柔術のアメリカ進出の道を拓いたのは、エリオの長男ホリオン・グレイシーであった。ホリオンがはじめて渡米したのは17歳の時分で、ロサンゼルスやハワイに約1年間滞在している。その際、アメリカにおけるグレイシー柔術の認知度の低さを目の当たりにしたホリオンは、この地にグレイシー柔術を普及させることを目標として掲げるに至った⁸⁸⁾。

ホリオンはブラジルに帰国後、大学卒業や弁護士資格の取得を経て7年後に再度渡米し、昭和53(1978)年にはロサンゼルスハマサビーチに道場を開設した。ここを拠点にグレイシー柔術の普及に努めたホリオンは、当時の模様を次のように回顧している⁸⁹⁾。

最初は道場と呼べるようなものではなかった。借りた家のガレージにマットを敷いて練

習を始めたんだ。自分で手書きで作ったチラシを配ったり、街で出会った人に声をかけたりしているうちに道場生は少しずつ増えていった。でも、まだまだ生徒数は少なかったし柔術を教えているだけでは、とても生活できなかった。

前述したように、グレイシー柔術のアメリカでの認知度は低調であったが、その状況を打開すべくホリオンが講じた方策は「異種格闘技戦」を行うことであった。かつて前田光世やエリオ・グレイシーが数々の他流試合に挑んだように、ホリオンもまた同様の手法をもってグレイシー柔術の優位性を広くアメリカ社会に知らしめようと考えたのである。

ホリオンは雑誌広告等を通して対戦相手を募り、道場としていたガレージを主な会場に「グレイシー・チャレンジ」と称する異種格闘技戦を繰り返した⁹⁰⁾。最初に対戦相手は、ランファ・アレグリアというキックボクサーであったが、ホリオン本人が「ガレージのマットの上で私は、すぐに相手をタックルで倒しチョークを決めた。ほんの数分の戦いだった。』⁹¹⁾と振り返るように、寝技に持ち込んだの圧勝であったという。

これを皮切りに「グレイシー・チャレンジ」を継続した結果、ロサンゼルスでの格闘技界におけるグレイシー柔術の認知度は徐々に高まっていった。「誰の挑戦でも受ける」と公言したホリオンは、「グレイシー・チャレンジ」において無敗を誇ったという⁹²⁾。

やがて、グレイシー柔術の普及に連れてホリオンが経営する道場の生徒数が増加したため、昭和61(1986)年に弟のホイス・グレイシーがブラジルから渡米することとなった。平成元(1989)年には「グレイシー柔術アカデミー」がロサンゼルス近郊の都市トーランスに開校される。このよう

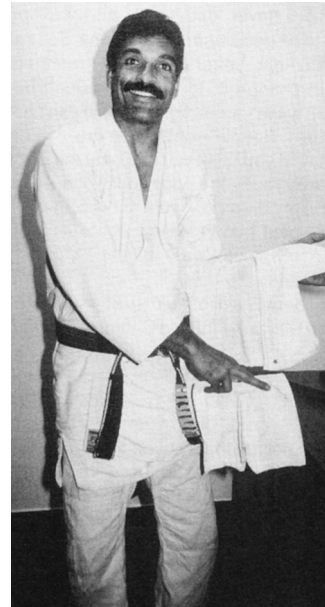


図7 ホリオン・グレイシー
『ワールドボクシング5月号増刊 ゴング格闘技特別編集 グレイシー柔術の一冊』日本スポーツ出版社、1995、p.68より転載。

にして、グレイシー柔術はアメリカにおいて着実に根を下ろしていったのである。

6-2 UFCの開催とその影響

以上のように、ホリオンによってグレイシー柔術のアメリカ進出が推し進められていったが、彼はやがてテレビ局と組んで格闘技イベントの開催を手掛けることになる。後に世界中の格闘技界に影響を及ぼした「The Ultimate Fighting Championship」(以下「UFC」)の始まりである。

手始めにホリオンは、門下生でもあったアート・デイビーと共同でWOWというプロモーション会社を興し、ニューヨークのケーブルテレビ局(SEG社)との交渉に入った。ホリオン自身がインタビューの中で「様々な格闘技が集って戦うという点が視聴者の興味を引いたんだ。それが最大の目的だ。』⁹³⁾と語っているように、この格闘技イベントはグレイシー柔術の十八番である異種格闘

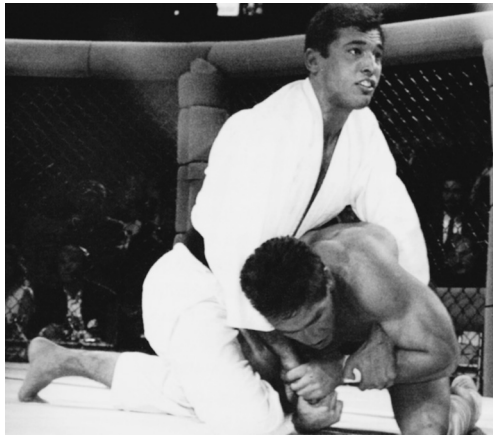


図8 ホイス・グレイシー

ホイス・グレイシー『ブラジリアン柔術 パーリ・トゥードテクニック トップ・ポジション編』新紀元社, 2005, p.18より転載。

技戦を意図するものであったといえよう。

かくして、SEG社を興行主として、平成5（1993）年11月12日にコロラド州デンバーにおいてUFCの第1回大会が開催の運びとなった。この大会で優勝したのはホイス・グレイシーであったが、ホイスの活躍がテレビ放送を通して世界中に報じられたことを契機に、グレイシー柔術の優位性が急速に広く知れ渡ることとなる。

第1回大会におけるホイスの戦いぶりは、以下の通りである。1回戦はボクサーのアート・ジマーソンを縦四方固めで下し（2分11秒）、続く2回戦でも、プロレスラーのケン・ウェイン・シヤムロックに対して寝技に持ち込み、最終的には裸締めで勝利している（1分02秒）。決勝戦はオランダの総合格闘家ジェラルド・ゴルドーとの対戦となった。開始早々、ホイスはタックルを試みて寝技に持ち込むと、1分59秒に仕掛けた裸絞めにゴルドーがタップして勝負は決着した⁹⁴⁾。このように、UFCにおけるホイスの戦いぶりは、寝技に強みをもつグレイシー柔術の特徴を際立たせるものとなった。

なお、ホイスは平成6（1994）年3月11日開催

の第2回大会においても優勝を収め、連覇を達成した。この大会では、ホイスは初戦で日本人の市原海樹と対戦しているが、5分12秒に変形送り襟絞めで退けている。

UFCにおけるホイスの活躍は、グレイシー柔術のアメリカ進出に多大なる影響を及ぼした。ホイスの快挙によってグレイシー柔術の競技人口が増加したばかりか、ブラジルで活動していた柔術家がこぞって渡米するようになり、アメリカ国内に柔術関連の道場が林立する事態を招来した⁹⁵⁾。ホリオンが目論んだグレイシー柔術のアメリカ進出は、格闘技イベントUFCの開催を通して概ね達成されたといえよう。

UFCにおけるホイスの連覇は、遠く日本でも大々的に報じられていた。雑誌『秘伝古流武術』の平成6（1994）年7月発売号には、グレイシー柔術関連の特集が組まれ、ホイスのUFCでの戦術が次のように総括されている⁹⁶⁾。

とにかくいつの場合でも、一刻も早く相手に組み付いて倒すか、柔道のもろて刈りのようなタックルで倒す。そればかりを狙う。そして、相手を倒すと馬乗りになる。万一、自分が下になった場合は体を入れ換えて逆転して、優位な馬乗りの態勢を確保しようとする。その間も、相手の反撃をできるだけ受けないように、道衣の袖を持つなり、腕で抱え込むなりして動きを封じながら、臨機応変に首を絞めたり、肘を極めたりしてギブアップをさせる。ほとんどの場合、締めか関節で仕留めるが、それが困難なときは、馬乗り状態で雨あられと相手に速射砲のような突きを浴びせ、戦意を奪ってギブアップさせることもある（関節や締めは不利な態勢からでもチャンスがあればいつでも取りに行く）。

上記の解説から、ホイスに代表されるグレイシー柔術が相手を「タックルで倒す」ことによって寝技に持ち込み、その後は締め技か関節技で仕留めようとするものであったことが窺える。また、同特集記事には「グレイシー柔術が実戦で使う技はごく限られているが、技自体は柔道の技である。」⁹⁷⁾との見解が示されている。当時の日本では、グレイシー柔術とはかつて前田光世がブラジルに持ち込んだ講道館柔道の技術体系を、寝技に特化して編み上げたものであったと理解されていたのである。

7. グレイシー柔術の日本進出

ここでは、アメリカで一世を風靡したグレイシー柔術が、そのルーツを持つ日本に「帰還」し、国内に普及していった模様を記述するものである。

7-1 グレイシー柔術の日本進出とその戦績

ホイス・グレイシーがUFCの第2回大会で連覇を成し遂げた直後、日本の格闘技界にもグレイシー柔術の波が押し寄せることとなった。そのはじめは、平成6（1994）年7月に千葉県の大塚市NKホールで開催された「バーリ・トゥード 1994ジャパン・オープン」である。この大会には、エリオの三男ヒクソン・グレイシーが参戦を表明したが、UFCの覇者ホイスがアメリカの格闘技専門誌上で「兄ヒクソンは、僕の10倍強い」と公言したことから、当時ヒクソンには世界中から熱い視線が注がれていたという⁹⁸⁾。

大会の結果は、ヒクソンが日本人を含む並み居る格闘家を抑えて優勝している。ヒクソンの1回戦の相手は日本人の西良典であったが、1ラウンド2分58秒に裸絞めが極まって勝利した。続く2回戦はダビット・レビキ（米）と対戦し、1ラウンド2分40秒でKO勝ちを収めている。決勝戦は

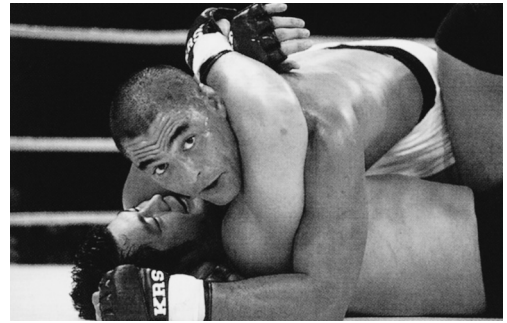


図9 ヒクソン・グレイシー
『総合格闘技20年史』ベースボール・マガジン社、2003、p.59より転載。

キックボクサーのバド・スミス（米）と闘うも、1ラウンド僅か39秒でKO勝ちし、見事優勝の栄冠に輝いた。なお、今大会のヒクソンの戦い方は、ホイスの場合と同様に、タックルで相手を倒してから寝技に持ち込むものであったと総括されている⁹⁹⁾。

翌年、同大会の第2回大会が東京の日本武道館で開催されているが、この大会でもヒクソンは山本宜久、木村浩一郎、中井祐樹といった日本人を次々と寝技（裸絞め）で攻略して連覇を達成した。

平成9（1997）年10月には、東京ドームにて総合格闘技イベント「PRIDE」の第1回大会が開催される。今大会のメインイベントはヒクソンと高田延彦との「世紀の一戦」であったが、この対戦はヒクソンが1ラウンド4分47秒に腕ひしぎ十字固めで勝利している。

表8は、平成6（1994）年から平成16（2004）年までのグレイシー一族と日本人格闘家との対戦記録を整理したものである。ヒクソンをはじめとするグレイシー一族の面々が、日本人に対して高確率で勝利することで、「母国」日本におけるグレイシー柔術の優位性を知らしめていった模様が看取される。

ここで注目すべきは、グレイシー側が勝利した

表8 グレイシー一族と日本人格闘家

対戦年月日	場所（会場）	イベント名
1994. 3. 11	米国コロラド州デンバー （マンモス・イベントセンター）	UFC-2
1994. 7. 29	千葉（東京ベイ NK ホール）	バーリ・トゥード1994 ジャパン・オープン
1994. 12. 7	米国カリフォルニア州	道場破り
1995. 4. 20	東京（日本武道館）	バーリ・トゥード1995 ジャパン・オープン（1回戦）
		（同準決勝）
		（同決勝）
1995. 11. 18	米国ノースカロライナ州ウィルミントン （カールコ・スタジオズ）	エクストリーム・ダイティング
1996. 7. 7	千葉（東京ベイ NK ホール）	バーリ・トゥード1996 ジャパン・オープン
1997. 10. 11	東京（東京ドーム）	PRIDE-1
1998. 3. 15	神奈川（横浜アリーナ）	PRIDE-2
1998. 10. 11	東京（東京ドーム）	PRIDE-4
1999. 11. 21	東京（有明コロシアム）	PRIDE-8
1999. 12. 22	大阪（大阪府立体育館）	KING of KINGS B ブロック
2000. 1. 30	東京（東京ドーム）	PRIDE グランプリ2000開幕戦
2000. 2. 26	東京（日本武道館）	KING of KINGS GRAND-FINAL
2000. 5. 1	東京（東京ドーム）	PRIDE グランプリ2000
2000. 5. 26	東京（東京ドーム）	コロシアム2000
2000. 8. 27	埼玉（西武球場）	PRIDE-10
2000. 12. 23	埼玉（さいたまスーパーアリーナ）	PRIDE-12
2001. 1. 8	愛知（愛知県体育館）	
2001. 7. 29	埼玉（さいたまスーパーアリーナ）	PRIDE-15
2001. 11. 3	東京（東京ドーム）	PRIDE-17
2002. 2. 24	埼玉（さいたまスーパーアリーナ）	PRIDE-19
2002. 6. 23	埼玉（さいたまスーパーアリーナ）	PRIDE-21
2002. 8. 28	東京（国立競技場）	Dynamaite!
2002. 9. 29	愛知（名古屋レインボーホール）	PRIDE-22
2002. 12. 23	福岡（マリンメッセ福岡）	PRIDE-24
2003. 8. 31	東京（両国国技館）	PANCRASE 2003 HYBRID TOUR
2003. 10. 5	埼玉（さいたまスーパーアリーナ）	PRIDE 武士道
2003. 12. 31	埼玉（さいたまスーパーアリーナ）	PRIDE SPECIAL 男祭り
2004. 2. 15	神奈川（横浜アリーナ）	PRIDE 武士道～其の貳～
2004. 5. 23	神奈川（横浜アリーナ）	PRIDE 武士道～其の参～
2004. 10. 14	大阪（大阪城ホール）	PRIDE 武士道～其の五～

『総合格闘技20年史』ベースボール・マガジン社、2003／『最強

との対戦結果一覧 (1994~2004年)

対戦カード (○→勝／●→負／△→分)	決まり手	時間
○ホイス・グレイシー vs.市原海樹●	変形送り襟絞め	5分12秒
○ヒクソン・グレイシー vs.西良典●	裸絞め	1 R. 2分58秒
○ヒクソン・グレイシー vs.安生洋二●	裸絞め	6分45秒
○ヒクソン・グレイシー vs.山本宜久●	裸絞め	3 R. 3分49秒
○ヒクソン・グレイシー vs.木村浩一郎●	裸絞め	1 R. 2分7秒
○ヒクソン・グレイシー vs.中井祐樹●	裸絞め	1 R. 6分22秒
○ハウフ・グレイシー vs.村岡真●	裸絞め	0分42秒
○ホイラー・グレイシー vs.朝日昇●	裸絞め	1 R. 5分7秒
○ヒクソン・グレイシー vs.高田延彦●	腕ひしぎ十字固め	1 R. 4分47秒
△ヘンゾ・グレイシー vs.小路晃△	引き分け	
○ホイラー・グレイシー vs.佐野友飛●	腕ひしぎ十字固め	33分14秒
○ベンゾ・グレイシー vs.菊田早苗●	首固め	6 R. 0分43秒
○ヒクソン・グレイシー vs.高田延彦●	腕ひしぎ十字固め	1 R. 9分30秒
●ホイラー・グレイシー vs.桜庭和志○	TKO	2 R. 13分16秒
○ヘンゾ・グレイシー vs.アレクサンダー大塚●	判定 5 - 0	
○ヘンゾ・グレイシー vs.坂田亘●	腕ひしぎ十字固め	1 R. 1分25秒
○ホイス・グレイシー vs.高田延彦●	判定 3 - 0	
●ヘンゾ・グレイシー vs.田村潔司○	判定 0 - 3	
●ホイス・グレイシー vs.桜庭和志○	TKO	6 R 終了
○ヒクソン・グレイシー vs.船木誠勝●	裸絞め	1 R. 11分46秒
●ヘンゾ・グレイシー vs.桜庭和志○	TKO	2 R. 9分43秒
○ハイアン・グレイシー vs.石澤常光●	TKO	1 R. 2分16秒
●ハイアン・グレイシー vs.桜庭和志○	判定 0 - 3	
△ホイラー・グレイシー vs.村浜武洋△	引き分け	
●ハイアン・グレイシー vs.石澤常光○	KO	1 R. 4分51秒
○ヘンゾ・グレイシー vs.小原道由●	判定 3 - 0	
○ホドリゴ・グレイシー vs.松井大二郎●		3 R. 0分28秒
●ヘンゾ・グレイシー vs.大山峻護○	判定 0 - 3	
○ダニエル・グレイシー vs.杉浦貴●	判定	
●ホイス・グレイシー vs.吉田秀彦○	KO	1 R. 7分24秒
○ハイアン・グレイシー vs.大山峻護●	腕ひしぎ十字固め	1 R. 1分37秒
○ボドリゴ・グレイシー vs.佐々木有生●	判定 3 - 0	
○クラウスレイ・グレイシー vs.國奥麒樹真●	判定 3 - 0	
○ハイアン・グレイシー vs.浜中和宏●	KO	1 R. 7分37秒
○ホドリゴ・グレイシー vs.高瀬大樹●	判定 3 - 0	
●ダニエル・グレイシー vs.中村和宏○	判定 0 - 3	
○ハウフ・グレイシー vs.三島☆ド根性ノ助●	判定 3 - 0	
○ダニエル・グレイシー vs.坂田亘●	腕ひしぎ十字固め	1 R. 7分12秒
△ホイス・グレイシー vs.吉田秀彦△	引き分け	
○ホドリゴ・グレイシー vs.桜井マッハ速人●	判定 3 - 0	
○ハイアン・グレイシー vs.美濃輪育久●	判定 2 - 1	
●ハウフ・グレイシー vs.五味隆典○	KO	1 R. 0分6秒
○クラウスレイ・グレイシー vs.桜井マッハ速人●	腕ひしぎ十字固め	2 R. 1分02秒

伝説グレイシー一族の攻防』河出書房新社, 2004, より作成。

際の決まり手として、柔道でいう「固め技」が多くみられることである。今日の柔道（JUDO）は国際化と引き換えに様々な要素を捨象していったが、グレイシー柔術は前田光世が伝えた講道館柔道を固め技（寝技）に特化して継承し、度重なる異種格闘技戦を経て作り上げられたためである。

7-2 日本におけるグレイシー柔術の普及と展開

このようにして、グレイシー柔術の使い手が各種の格闘技戦において好成績を収めるに連れて、日本人格闘家の中にもプロ・アマ問わずこれを習得しようと試みるものが現れる。

とりわけ、平成10（1998）年には日系ブラジル人を中心に「日本ブラジリアン柔術連盟（BJJFJ）」が発足するが、これがグレイシー柔術普及のための大きな契機となったという¹⁰⁰⁾。同連盟の初代会長に就いたのは、かつてブラジルでヒクソンから直接手解きを受けた渡辺孝真であった。BJJFJは同年8月に東京で第1回「全日本ブラジリアン柔術選手権大会」を開催しているが、この大会は現在（2016年3月現在）までに16回を数えている。なお、「国際ブラジリアン柔術連盟（IBJJF）」の傘下にある同連盟では、帯の保持や登録団体であることを保証する証明書の発行を実施している。

やがて、平成20（2008）年にはヒクソンを会長に据えた「全日本柔術連盟（JJFJ）」が設立され、相談役にはかのエリオ・グレイシーが就任した。同連盟ではメインの大会として、設立初年より「全日本柔術選手権大会」を開催し、今日まで継続している。

こうした柔術関連団体の設立と相まって、日本でもグレイシー柔術を教授する道場が目立つようになり、その競技人口も増加傾向を辿っていくことになる。ヒクソンが持ち込んだグレイシー柔術

は、着実に日本の格闘技界に根を下ろしていったといえよう。

8. おわりに

本稿は、柔道という日本固有の武道文化が、日本の文化圏を飛び出してどのように普及および変容していったのかについて、特にブラジルにおける柔道の変容形態たるグレイシー柔術に着目して論じたものである。

検討の結果は、以下のように整理することができる。

1. 柔道の前身たる柔術の原形は、中世の武士が合戦時の白兵戦を想定して訓練していた「組打ち」などにみることができる。やがて、近世になって泰平の世が実現すると、柔術は実用術としての姿を捨て去って武芸化し、多くの流派が乱立していった。幕末期における柔術の技術体系は、投げ技、固め技、当て身技の三つに集約されるものであったが、これが明治期になって嘉納治五郎をして「柔道」という名称で体系化されることとなる。
2. 明治15（1882）年、嘉納治五郎は東京の下谷区に「講道館」を開設した。若い時分より柔術を嗜んできた嘉納は、投げ技を重視する「起倒流」と固め技を中心に据える「天神真楊流」の技術体系を折衷させた柔術を指南していた。やがて、明治20（1887）年頃になると、嘉納は上記二流派の折衷的な段階を脱して独自の「講道館柔道」としての技術体系を形成していった。
3. 明治30（1897）年、東京専門学校（現・早稲田大学）の学生であった前田光世が講道館に入門する。すでに中学時代より柔道の稽古に励んでいた前田は、講道館入門後ただちに頭角を現し異例のスピードで昇段していった。その実力を見込まれた前田は、講道館柔道の

海外普及を託されたメンバーのうちに抜擢され、明治37（1904）年に渡米した。

4. 前田はアメリカを皮切りに、イギリス、ベルギー、スペイン、キューバ、メキシコ、グアテマラ、ブラジルを渡り歩き、各国の格闘家を相手に数多くの「異種格闘技戦」を繰り広げていった。柔道の海外普及のためには、他流試合における勝利を通してその優位性を証明すべきだと考えたからである。
5. 講道館時代の前田は固め技（寝技）を好まなかったが、彼は異種格闘技戦の大半を固め技を用いて勝利している。対戦相手の多くはレスラーであったが、戦いに勝つには彼らが得意とする寝技の攻防に長けている必要があったため、前田はこれを契機に高度な固め技を習得していったのである。前田の講道館柔道は、数々の異種格闘技戦を経て固め技（寝技）を重視するものへとシフトしていったといえよう。
6. 明治40年代より、多くの日本人がブラジルに移住するようになる。彼ら日系移民の中で柔道の心得のある者達は、道場を開いてブラジル人に柔道を教授したり、現地の格闘家と異種格闘技戦を行うなどして柔道の普及に努めていた。ブラジルへの柔道の伝播は、日系移民のブラジル入植とほぼ同時に始まっていたのである。したがって、前田光世が柔道伝播を目的にブラジルに到達した時には、当該地域において柔道を受容し得る素地がある程度整えられつつあったといえよう。
7. 大正3（1914）年、前田はブラジルに到達し、サンパウロやリオ・デ・ジャネイロ等々を経て翌年にはアマゾン川河口のベレンに至った。前田はベレン市内において道場を開設し、柔道の普及に勤しんでいた。前田が柔道の手解きをした者の中に、現地の政治家ガ

スタオン・グレイシーの長男カルロス・グレイシーがいた。そこで教授した柔道とは、立ち技を中心としながらも、ある程度の寝技が含まれたものであった。

8. グレイシー一家がリオ・デ・ジャネイロに移住した際、カルロスは前田から継承した柔道を広めるべく、大正14（1925）年に「グレイシー柔術アカデミー」という道場を創設し、ここに「グレイシー柔術」が誕生する。カルロスの弟エリオ・グレイシーは、兄が「グレイシー柔術アカデミー」で指導する模様に接しながら自らも柔術にのめり込み、やがて兄を凌ぐ実力を身につけて道場の中心的な指導者にとって代わることとなった。
9. グレイシー柔術の普及を目指したエリオは、前田光世と同じく異種格闘技戦に挑戦するようになった。エリオの主な対戦相手は、ボクサー、レスラー、日系人柔道家であったが、いずれも敗戦することはなく勝利を積み重ねていった（引き分けも含む）。昭和26（1951）年、日本でも名高い柔道家らが訪伯し、エリオと一戦を交えた。まず、エリオは加藤幸夫と対戦し、1戦目は引き分けたものの2戦目では前十字絞めで勝利している。次いで、日本人最強の柔道家の呼び声高い木村政彦との対戦が実現するが、エリオは木村の仕掛けた固め技によって失神し、生涯唯一の敗北を喫した。
10. こうした数々の異種格闘技戦の過程において、エリオは独自の技術体系を練り上げていった。エリオの兄カルロスの柔術は「立ち技」が主体であったとされるが、エリオの試合運びは大半が「寝技」に持ち込むことを主要な戦術としていたからである。後にエリオを発信源として広まっていくグレイシー柔術とは、前田光世がブラジルに伝えた数々の柔

道技のうち、「寝技」こそが実戦を想定した場合に有効だと捉えたエリオが、その部分に特化して体系化したものであったといえよう。

11. グレイシー柔術の世界進出の道を拓いたのは、エリオの長男ホリオン・グレイシーであった。ホリオンは昭和53（1978）年にロサンゼルスに道場を開設するが、グレイシー柔術のアメリカでの認知度が低調であったことから、道場を拠点として「グレイシー・チャレンジ」と称する異種格闘技戦を継続的に実施した。その結果、グレイシー柔術の認知度の高まりと相まって道場生が増加し、平成元（1989）年にはトーランスに「グレイシー柔術アカデミー」を開校した。
12. こうして、グレイシー柔術が徐々にアメリカに根を下ろしていくが、やがてホリオンはテレビ局と組んで大規模な格闘技イベントを企画し、平成5（1993）年に第1回「UFC」を開催する。この第1回と第2回大会で圧倒的な強さをみせて連覇を達成したのは、ホリオンの弟ホイス・グレイシーであった。その活躍が世界中にメディアを通して報じられたことで、グレイシー柔術の優位性がアメリカのみならず世界中に急速に知れ渡っていった。
13. グレイシー柔術の世界進出の波は、すべからず日本にも押し寄せることとなった。そのはじまりは、平成6（1994）年開催の「バーリ・トゥード1994ジャパン・オープン」であった。この大会には、エリオの三男ヒクソン・グレイシーが参戦し、日本人を含む並み居る格闘家を抑えて優勝を収めている。その後も、ヒクソンをはじめとするグレイシー一族の面々が日本人に対して高確率で勝利することで、「母国」日本においてグレイシー柔術の優位性が急速に認知されていった。なお、

エリオに由来する技術体系を継承したグレイシー一族は、勝利した試合の大半を「寝技」によって決着させている。

14. グレイシー柔術の使い手が日本国内で好成績を収めていくに連れて、日本人の間にもプロ・アマ問わずその習得を試みるものが現れた。また、平成10（1998）年には「日本ブラジリアン柔術連盟（BJJFJ）」が、平成20（2008）年には「全日本柔術連盟（JJFJ）」が設立され、柔術を教授する道場が相次いで開かれて競技人口も増加傾向を辿っていった。

以上述べてきたように、日本で嘉納治五郎が創始した講道館柔道は、その海外普及を託された前田光世の手で一旦ブラジルへ伝播し、それがエリオ・グレイシーを経由してグレイシー柔術として醸成された後、今度はエリオを頂点とするグレイシー一族の方が世界進出の道中で母国日本にもこれを持ち込み、日本の格闘技界を席卷していったと結ぶことができよう。

〔付記〕

本稿は、『東洋法学』（東洋大学法学会発行）に掲載された「柔道の普及と変容に関する研究—グレイシー柔術に着目して—（その1）」（55巻3号）、「同その2」（56巻3号）、「同その3・完」（58巻1号）の内容を一部再構成し、図表の見直しも含めて加筆修正を施したものである。

また、本稿は科学研究費補助金・基盤研究B（課題番号：23300233）の助成を受けたものである。

<注記および引用・参考文献>

- 1) 野々宮によれば、国際スポーツとは「地球規模で相互承認的に形成された通文化的コミュニケーション・ネットワーク状態にあるスポーツ」（野々宮徹「民族スポーツの現在」『図説スポーツの歴史』大修館書店、1996、p.222）のことであるという。
- 2) ホイス・グレイシーは、グレイシー柔術について次のように説明している。「グレイシー柔術は『行為と反応』の原則に基づく格闘技である。（中略）力に対し、力でねじ伏せるのではない。グレイシー柔術をたしなむ人は、対戦者が向けてくる力を自分に有利

- になるように使うことを学んでいる。(中略) グレイシー柔術はいくつかのシンプルな原理に基づいてい
る一行為と反応、梃子の原理、安定した姿勢などである。」(ホイス・グレイシー『ブラジリアン柔術
バーリ・トゥードテクニック・トップポジション編
—』新紀元社, 2005, p.9)
- 3) 丸山三造編著『大日本柔道史』講道館, 1939/横山
健堂『嘉納先生傳』講道館, 1941/長谷川純三編著
『嘉納治五郎の教育と思想』明治書院, 1981/飯塚一
陽『柔道を創った男たち』文藝春秋, 1990/永木耕
介『嘉納治五郎の柔道観の力点と構造』『武道学研
究』32巻1号, 1999.9, pp.42-69/永木耕介『嘉納柔
道思想の継承と変容』風間書房, 2008/生誕150周年
記念出版委員会編『嘉納治五郎』筑波大学出版会,
2011など多数。
 - 4) 神山典士『ライオンの夢—コンデ・コマ=前田光世
伝—』小学館, 1997/丸島隆雄『前田光世—世界柔
道武者修行—』島津書房, 1997/野木将典『実戦倫
理 前田光世(コンデ・コマ)——千戦無敗の男“柔
道と開拓”—』『國士館大學武徳紀要』18号,
2002.3, pp.1-42/三戸建次『コンデ・コマ物語』路
上社, 2013
 - 5) Show 編著『グレイシー柔術の真実』フットワーク出
版社, 1994/ミスターX『グレイシー柔術・格闘技名
勝負の読み方』ポケットブック社, 1994/堀辺正史
・谷川貞治『武道と他流試合』ベースボール・マガ
ジン社, 1995/洪澤恵介『最強伝説グレイシー族
の攻防』河出書房新社, 2004/近藤隆夫『グレイ
シー族の真実』文藝春秋, 2003
 - 6) 別宮三敬「グレイシー柔術—闘争の実験場から垣間
見える柔術の正体—」『秘伝』24号, 1994.7, pp.26-
35/『ワールドボクシング5月号増刊 ギング格闘技
特別編集 グレイシー柔術の一冊』日本スポーツ出版
社, 1995
 - 7) 松村明監修『大辞泉(増補・新装版)』小学館,
1998, p.1257
 - 8) 磯貝一『柔道手引草』武徳会誌発売所, 1910, p.10
 - 9) 丸山三造編著『大日本柔道史』講道館, 1939, p.40
 - 10) 老松信一「柔道の技術史」『スポーツの技術史』大修
館書店, 1972, p.200
 - 11) 「柔道」『運動界』2巻3号, 1898.3, p.11
 - 12) 「柔道」『運動界』2巻3号, 1898.3, p.11
 - 13) 嘉納治五郎「柔道」『アレス運動大講座 第四巻』ア
ルス, 1928, p.6
 - 14) 井上俊『武道の誕生』吉川弘文館, 2004, p.20
 - 15) 嘉納治五郎『嘉納治五郎—私の生涯と柔道—』日本
図書センター, 1997, p.105
 - 16) 木下秀明「近代武道への歩み」『近代武道の系譜』杏
林書院, 2003, p.4
木下によれば, その論拠は「嘉納が1883年に起倒流
免許皆伝を受けたこと, 1884年に初めて作られた入
門張が1882年に遡って記名されたこと, 嘉納が1885
年に弟子の山田(富田)常次郎宛の書状に『講道
館』でなく『起倒流 嘉納治五郎』と署名したこと,
1885年に嘉納が『幹事兼教授』になったにもかかわらず,
依然として『柔術』であった学習院が, 1888
年9月に嘉納が『学習院長事務取扱』になると同時
に『柔道』を採用したこと, 翌月の雑誌『日本文
学』に掲載した『柔術及び其起源』の中で, 嘉納が
『柔道』を『柔術』の一つと位置づけながら『講道館
に於てなせる柔道講義』に言及したこと, および,
嘉納が『講道館柔道』について大日本教育会で講演
したのが1889年であったこと」(同上書, pp.4-5) に
あるという。
 - 17) 井上俊『武道の誕生』吉川弘文館, 2004, p.21
 - 18) 嘉納治五郎『嘉納治五郎—私の生涯と柔道—』日本
図書センター, 1997, p.103
 - 19) 丸山三造編著『大日本柔道史』講道館, 1939, p.916
 - 20) 嘉納治五郎『嘉納治五郎—私の生涯と柔道—』日本
図書センター, 1997, p.104
 - 21) 丸島隆雄『前田光世—世界柔道武者修行—』島津書
房, 1997, p.14
 - 22) 野木将典『実戦倫理 前田光世(コンデ・コマ)——
千戦無敗の男“柔道と開拓”—』『國士館大學武徳紀
要』18号, 2002.3, pp.8-9
 - 23) 早稲田大学柔道部百年史編集委員会編『早稲田大学
柔道部百年史』早稲田大学柔道部, 1997, p.212
 - 24) 神山典士『ライオンの夢—コンデ・コマ前田光世伝
—』小学館, 1997, pp.29-30
 - 25) 丸島隆雄『前田光世—世界柔道武者修行—』島津書
房, 1997, p.42
 - 26) 早稲田大学柔道部百年史編集委員会編『早稲田大学
柔道部百年史』早稲田大学柔道部, 1997, p.214
 - 27) 前田光世記・薄田斬雲編『世界横行柔道武者修業』
博文館, 1912
 - 28) 前田光世記・薄田斬雲編『新柔道武者修行』博文
館, 1913
 - 29) 前田光世記・薄田斬雲編『世界横行柔道武者修業』
博文館, 1912, p.4
 - 30) 前田光世記・薄田斬雲編『世界横行柔道武者修業』
博文館, 1912, p.17
 - 31) 前田光世記・薄田斬雲編『世界横行柔道武者修業』
博文館, 1912, p.18
 - 32) 前田光世記・薄田斬雲編『世界横行柔道武者修業』
博文館, 1912, pp.400-405
 - 33) 前田光世記・薄田斬雲編『世界横行柔道武者修業』
博文館, 1912, p.425
 - 34) 講道館編『柔道』講道館, 1949
 - 35) 講道館編『柔道』講道館, 1949, p.17
 - 36) 講道館編『柔道』講道館, 1949, p.17
 - 37) 講道館編『柔道』講道館, 1949, p.17
 - 38) 井上俊『武道の誕生』吉川弘文館, 2004, p.22
 - 39) 前田光世記・薄田斬雲編『世界横行柔道武者修業』
博文館, 1912, p.452
 - 40) 別宮三敬「グレイシー柔術—闘争の実験場から垣間
見える柔術の正体—」『秘伝』24号, 1994.7, p.32

- 41) 前田光世記・薄田斬雲編『世界横行柔道武者修業』博文館, 1912, p.253
- 42) 丸島隆雄『前田光世一世界柔道武者修行一』島津書房, 1997, p.25
- 43) 半田知雄編『ブラジル日本移民史年表』サンパウロ人文科学研究所, 1976, p.20
- 44) 増田俊也『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』新潮社, 2011, p.325
- 45) ブラジル日本移民70年史編さん委員会編『ブラジル日本移民70年史』ブラジル日本文化協会, 1980, p.207
- 46) 増田俊也『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』新潮社, 2011, p.327
- 47) 増田俊也『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』新潮社, 2011, p.327
- 48) 「カポエイラは16世紀にポルトガルに連れてこられたアフリカの奴隷の間で始まった格闘術, ダンス, 音楽, 歌などの混合したものである。カポエイラの原初形態は『カポエイラ・アングラ』と呼ばれ, 世代から世代へ口頭で伝えられてきた。奴隷制に反抗する戦いと密接に結びついていた。」(クルデリ著, 川成洋ほか訳『世界武道格闘技大百科』東邦出版, 2010, p.340)
- 49) 日本移民80年史編纂委員会編『ブラジル日本移民八十年史』移民80年祭祭典委員会・ブラジル日本文化協会, 1991, p.342
- 50) ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会編『ブラジルに於ける日本人発展史 下巻』ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会, 1942, p.562
- 51) 前田光世記, 薄田斬雲編『世界横行柔道武者修行』博文館, 1912
- 52) 前田光世記, 薄田斬雲編『新柔道武者修行 世界横行第二』博文館, 1912
- 53) 丸島隆雄『前田光世一世界柔道武者修行一』島津書房, 1997, p.245
- 54) 丸島隆雄『前田光世一世界柔道武者修行一』島津書房, 1997, pp.274-275
- 55) 野木将典「前田光世 (コンデ・コマ)」『国士館大学武徳紀要』18号, 2002.3, p.18
- 56) 古屋敏恵『神秘境大アマゾンを探る』タイムス出版社, 1929, p.259
- 57) 丸島隆雄『前田光世一世界柔道武者修行一』島津書房, 1997, p.286
- 58) 丸島隆雄『前田光世一世界柔道武者修行一』島津書房, 1997, p.292
- 59) 前田の「柔道」は現地で「柔術」という名称をもって受け容れられることになるが, これはいかなる理由によるものであろうか。このことを知るべく, 井上の見解を以下に引いておこう。「柔術という言葉は, jujutsu または jujitsu (英), ju-jitsu (仏), jujitsu (伊) といった綴りで, 日露戦争のあとぐらいから, 欧米各国の辞書類などに収録されるようになる。アメリカの代表的な辞書の一つ『ウェブスター国際英語辞典』は, 一九〇九年の改訂新版 (Webster's New International Dictionary of English Language) で, jujutsu と judo をともに収録した。しかし, judo は外国語として欄外に記載され, 『=jujutsu』となっているにすぎない。つまり, 柔術と柔道は区別されておらず, 外来語として正式に辞書に登録されているのは柔術のほうなのである。(中略) 当時はまだ柔術のほうがポピュラーな名称であり, 海外においてはとくにそうであった。だから, たとえば前田光世なども, 海外における『柔道の宣揚』をモットーとしてはいたが, あえて柔道という名称にはこだわらず, 通りのよい柔術を用いることが多かった。」(井上俊『武道の誕生』吉川弘文館, 2004, p.84)
- 60) 近藤隆夫『グレイシー族の真実』文藝春秋, 2003, p.25
- 61) 近藤隆夫『グレイシー族の真実』文藝春秋, 2003, p.24
- 62) 丸島隆雄『前田光世一世界柔道武者修行一』島津書房, 1997, p.292
- 63) 近藤隆夫『グレイシー族の真実』文藝春秋, 2003, p.24
- 64) 近藤隆夫『グレイシー族の真実』文藝春秋, 2003, p.24
- 65) 松尾サトシ「グレイシー柔術歴史講座初級編」『グレイシー柔術の一冊 ワールドボクシング5月号増刊』日本スポーツ出版社, 1995, p.80
- 66) 丸島隆雄『前田光世一世界柔道武者修行一』島津書房, 1997, p.7
- 67) エリオ・グレイシー出演『グレイシー柔術の歴史秘技 (VHS)』東北新社, 1995
- 68) エリオ・グレイシー出演『グレイシー柔術の歴史秘技 (VHS)』東北新社, 1995
- 69) 増田俊也『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』新潮社, 2011, pp.366-367
- 70) エリオ・グレイシー出演『グレイシー柔術の歴史秘技 (VHS)』東北新社, 1995
- 71) エリオ・グレイシー出演『グレイシー柔術の歴史秘技 (VHS)』東北新社, 1995
- 72) 増田俊也『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』新潮社, 2011, p.367
- 73) エリオ・グレイシー出演『グレイシー柔術の歴史秘

- 技 (VHS)』東北新社, 1995
- 74) エリオ・グレイシー出演『グレイシー柔術の歴史秘技 (VHS)』東北新社, 1995
- 75) エリオ・グレイシー出演『グレイシー柔術の歴史秘技 (VHS)』東北新社, 1995
- 76) 近藤隆夫『グレイシー一族の真実』文藝春秋, 2003, p.35
- 77) 増田俊也『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』新潮社, 2011, p.378
- 78) 増田俊也『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』新潮社, 2011, pp.392-396
- 79) エリオ・グレイシー出演『グレイシー柔術の歴史秘技 (VHS)』東北新社, 1995
- 80) 木村政彦『わが柔道』ベースボール・マガジン社, 1985, p.143
- 81) 岸野雄三『スポーツの技術史序説』『スポーツの技術史』大修館書店, 1972, p.14
- 82) マイネル著, 金子明友訳『スポーツ運動学』大修館書店, 1981, p.261
- 83) 金子明友『運動技術論』『序説運動学』大修館書店, 1968, p.109
- 84) ヒクソン・グレイシー著, 高梨明美訳『ヒクソン・グレイシー 無敗の法則』ダイヤモンド社, 2010, p.28
- 85) ヒクソン・グレイシー著, 高梨明美訳『ヒクソン・グレイシー 無敗の法則』ダイヤモンド社, 2010, p.19
- 86) 近藤隆夫『グレイシー一族の真実』文藝春秋, 2003, p.24
- 87) ホイス・グレイシー著, 黒川由美訳『ブラジリアン柔術 バリー・トゥードテクニクトップ・ポジション編』新紀元社, 2005, p.9
- 88) 近藤隆夫『グレイシー一族の真実』文藝春秋, 2003, p.65
- 89) 近藤隆夫『グレイシー一族の真実』文藝春秋, 2003, p.67
- 90) 近藤隆夫『グレイシー一族の真実』文藝春秋, 2003, pp.73-74
- 91) 近藤隆夫『グレイシー一族の真実』文藝春秋, 2003, p.74
- 92) 近藤隆夫「グレイシー家4大インタビューホリオン・グレイシー」『グレイシー柔術の一冊ワールドボクシング5月号増刊』日本スポーツ出版社, 1995, p.65
- 93) 近藤隆夫「グレイシー家4大インタビューホリオン・グレイシー」『グレイシー柔術の一冊ワールドボクシング5月号増刊』日本スポーツ出版社, 1995, pp.69-70
- 94) 「THE UFC DIGEST」『グレイシー柔術の一冊ワールドボクシング5月号増刊』日本スポーツ出版社, 1995, pp.190-192
- 95) 近藤隆夫『グレイシー一族の真実』文藝春秋, 2003, pp.124
- 96) 別宮三敬「闘争の実験場から垣間見える柔術の正体—特集グレイシー柔術—」『秘伝古流武術』24号, 1994, 7, p.27
- 97) 別宮三敬「闘争の実験場から垣間見える柔術の正体—特集グレイシー柔術—」『秘伝古流武術』24号, 1994, 7, p.30
- 98) 渋谷恵介『最強伝説 グレイシー一族の攻防』河出書房新社, 2004, p.41
- 99) 「THE UFC DIGEST」『グレイシー柔術の一冊ワールドボクシング5月号増刊』日本スポーツ出版社, 1995, pp.210-212
- 100) 川越和人「還流する Jiu-Jitsu—『移民』とブラジリアン柔術」『海を渡った柔術と柔道—日本武道のダイナミズム—』青弓社, 2010, pp.261-264